

## 蛇から逃げる

—— *A Mere Accident* 試論 ——

野末 紀之

## 1

Joseph Hone の *The Life of George Moore* (1936) のなかに、ムアの語る興味ぶかいエピソードが出てくる<sup>1</sup>。——私は一度だけ結婚を考えたことがある。かつて散歩仲間の女性にプロポーズしようと決めただけで、あの曲り角で、いやあの橋の上でと思っているうちにチャンスを逃してしまった。そこで手紙を書こうと思い立ち、いくども書き損じて仕上げたものを宿の主人に託して送り出したのに、すぐに不安を感じて手紙を取り戻した。あとになって自分で出しに行ったのだが、どの郵便ポストにするか迷いつづけ、けっきょく出さずに帰ってきてしまった。その女性はのちに別の男と結婚した。——ムアは自分が結婚に向かない性格であることをわかっていたと言う<sup>2</sup>。ここでその理由は書かれていない。しかし、理由の如何を問わず、この逡巡を重ねて飽きることのない口調そのものに、プロポーズから結婚にいたるまでに必要な男性性が見事に欠けている。

ムアの作品にこれとよく似た主人公が登場するものがある。*A Mere Accident* (1887) (以下 MA) の主人公 John Norton は、プロポーズを決意するものの実行に移す勇気がなく、再三チャンスを逃す。なんとかやり遂げることができたのは、たまたま占い師が現われたからにすぎない。MA を手直した “John Norton” (1895) の主人公はさらに、プロポーズを受け入れられたあとで、やはり自分は結婚に向かないと判断し婚約の破棄を申し出ようとする。ムアは、前作を根本的に書き直した “Hugh Monfert” (1922; 改版 1923) であらたな設定を行なっている——主人公

は床入りの段になって、婚約者ではなくその兄を愛していることに気がつき、結婚の解消を決意するのである。それまでの二作品に婚約者の父はいるが、兄は存在しない。また、MA と “John Norton” ではジョンの婚約者 Kitty が放浪者にレイプされたのち狂死する。これにたいし、“Hugh Monfert” では暴行事件そのものが破棄され、上記の設定に取って代わられている。作品のモデルとされる Edward Martyn が女嫌いの同性愛者であったことからすれば<sup>3</sup>、この方がはるかに自然である。すると、ムアがレイプ事件を設定したのはホモセクシュアルの結婚生活を描くことができなかつたせいであろうと考えるのも無理はない<sup>4</sup>。ジョンがプロポーズをためらう理由はこれで説明が付きそうだが、けれども、それだけでは片付かないのではなからうか。というのも、事件後キティの見る悪夢と幻覚はジョンの資質と連動して、作品全体のメッセージを伝えているようにみえるからだ。端的にいえば、性行為とりわけ生殖のための性交（以下性交＝生殖と略記）への大きな不安と抜きがたい嫌悪である。

作品刊行のさいムアは自信をもっていたが、レイプを書いたというので評判は芳しくなく<sup>5</sup>、また心酔していたペイターからも否定的な感想が返ってきたために<sup>6</sup>、みずから評価を変えてしまった。MA は彼のどの著作集にも入っていないし、研究対象に取上げられることも稀である。が、35年にわたりムアがこの主人公への関心を持続させていたことは無視できない<sup>7</sup>。たしかに MA は他の作品にくらべると完成度の点で劣るけれども、問題作と呼ぶことはできるだろう。ジョンのセクシュアリティ、キティの見る悪夢と幻覚に着目することでその点を明確にしたい。

## 2

サセックス州の地主の息子ジョン・ノートンにとって、生家 Thornby Place は「彼が生なのなかの下品で卑猥だと見なすものの包括的象徴」(31-2)にすぎない<sup>8</sup>。女を嫌うジョンの理想は中世僧侶の禁欲生活である。彼は一年の大半をイエズス会の神学校でおくり、ラテン語詩文の研究に没頭し

ている。土地の管理や小作人の世話に実務能力を発揮するものの、この点は人目につかないようにしている。家族でひとり残っている母からは、家系存続のために早く結婚して子どもをつくるよう求められており、それが母子の喧嘩の種となっている。11月に帰郷した彼を待っていたのは、母が多くの未婚女性たちを招待するパーティである。終了後、彼は気分が悪くなり、生死をさまようなかで神を冒瀆する言葉を吐く（内容は不明）。これを契機に神父になろうと決意し神学校に戻るが、結婚の仲介を行なうイエズス会の世俗性に失望し、別の決意をもって帰郷する。カルメル会士と同居するため生家を僧院に改築しようというのである。ところが、友人の牧師の娘キティと親しく時をすごすうちに結婚への欲求が生まれる。前述のように、ジョンはプロポーズの機会を何度も逃すが、偶然これを果たし受け入れられる。が、結婚式の一ヶ月まえにキティは事件に巻き込まれる。悪夢と幻覚のなかで犯人に追いかけられ、彼女は窓から身を投げて死ぬ。ジョンは牧師になるのを断念し、「この世をわが僧院にしよう」（282）と決意する。世俗の独身者として生きようとするのである<sup>9</sup>。

ジョンは女や生家を世俗的だとさかんに非難するが、自身の容貌に禁欲だけでなく官能への傾斜が刻印されていることに気づいていないようだ——唇は「肉厚だが、官能性のかけらもない」のに、手は「大きくて力強く、握力が強い。世俗的（earthly）である」（50）。目は彼の「観念性」（*ibid.*）を示すものの、声には「世俗的な快活さ」（*mundane cheerfulness*）がある（51）。語り手はジョンの洒落者ぶりに言及しつつ、彼の二面性をこうまとめる——「当世風の衿に黒のサテンのネクタイを美しく締め、それを高価な真珠のピンで引き立たせていたが、これは、見たところ調和しがたい特徴の集積に、意外ではあるものの奇妙に魅力的なもうひとつの細部を提供していた」（50）。「見たところ調和しがたい特徴の集積」（*an aggregate of apparently irreconcilable characteristics*）——これがジョンの性格の根幹を成している。部屋の片方にアウグスチヌスや聖ジェロームなどキリスト教の聖人の著作をならべた棚があり、その向いにスウィンバー

ン、ロセッティ、モリス、ペイターなどの唯美主義者や、ゴッティエ、フロベール、ゾラといったイギリスで道徳的に問題視される作家たちの作品を収めた棚がある(76-7)。禁欲は官能への傾斜があってはじめて意義ぶかくなると考えるなら、この二面性は十分理解できる。

語り手はしかし、ジョンにはある種の狂気がひそんでいることも示唆している。目より上には「脳の歪みを示す多くの特徴」があるとし、「目の観念性」への言及のあとにこうつけ加えている——「狂気の領域に隣接する観念性」(an ideality that touched the confines of madness)と(50)。ジョンは「神秘主義と独断によりどこを求めて、ある地点まで急速に高揚する」が、他方「冷たく清らかな天上のごとき理性」の作用により、「おなじくらい急速に落ち込む」と語られてもいる(49-50)。昂進する空想と理性的判断とのあいだを大きく揺れるジョンの姿はキティとの関係において表出されるだろう。

ジョンのセクシュアリティもまた、「倒錯的」な性質をおびている。それは、部屋にある絵画や家具の記述から顔をのぞかせる。書斎の壁に掛けられた絵のなかには、モネの『日本の女』、ガーターをつけている少女像、それにダンサーを描いたドガの『緞帳』などがある。禁欲家の女嫌い(misogynist)の鑑賞する絵画としては不似合いである(72-4)。椅子は背もたれが角張って「ナイフのよう」(74)であり、ジョンにとって「この硬いオーク材の椅子」より「クッションを敷く方がはるかに不愉快」である(75)。この椅子は感覚的喜びとは無縁に見えるが、礼拝堂の隅に跪く女たちへの「うんと鞭打ちすべきだ」(62)というジョンの言葉と共鳴し、彼のサドマゾヒスティックな快楽を暗示する。このパラドクシカルなあり方は、ジョンの寝室に置かれた十字架像についてもいえる。はじめそれは、禁欲のシンボルとして言及される(74)。ところが、神を冒瀆したジョンが自己のあり方を振り返るときは、ホモエロティックな陰影をおびて立ちあらわれる——かつての彼の理想として「ギリシャの神々の荘厳な裸体」と「やつれた聖人の傷つけられた肉体」とは「同等」であったが、やがて「神

性が血液のごとく循環しているような [アポロンの] 美しい細身の肉体」は十字架像に圧倒されたという。しかしジョンは、アポロンの写真を「青年時代の大きいなる苦悩と大きいなる誘惑」を示すものとして部屋に飾っている (135)。ジョンはキリストの勝利を語りつつも、アポロンの裸体の魅力を述べているのである。両者は根本的に対立するのではなく、おなじ肉体に根拠をもつ魅力的な二者である。じっさい、このあとジョンは語っている——16歳のときにはじめて「生の物質法則」を知ったとき、「生来の肉体への憎悪」(hatred of natural flesh) に襲われ、「神聖な肉体への危険な崇拜 (perilous worship)」に駆り立てられた——これまで彼の「神への愛は官能を満たすというかたちをとっていたにすぎない」と (135-6)。これによりジョンは禁欲への意志を強め、イエズス会の神父になろうとする。その決意の成り行きは今後の展開によって示されるが、そもそも彼の禁欲は、それじたい官能の一形態なのだ。こういうジョンの倒錯的多面的なセクシュアリティのあり方をみると、ホモかヘテロかという二者択一のロジックはうまく機能しないように思える。潜在するホモセクシュアリティ以外にも、彼の性交＝生殖への嫌悪には肉欲否定、母の干渉への拒絶、平穏な学究生活への願望、家族の養育という社会的束縛への嫌悪など、さまざまな要因がからんでいる。ホモセクシュアリティの自覚がテーマとなる“Hugh Monfert”とはちがひ、MAではヘテロの性交＝生殖にたいする否定のベクトルが強くはたらいっている。

先に述べたように、ジョンの書棚にはペイターの作品がある。神学校を訪れた牧師ヘアとの話でジョンはペイターの *The Renaissance* (1873) や *Marius the Epicurean* (1885) (以下『マリウス』) のすばらしさを語る。むろんこれはムアのペイター崇拜の反響だが<sup>10</sup>、このあとの記述にはそれ以上に作品のテーマにかかわる重要性がある。『マリウス』を「覚醒」(awakening) と呼ぶジョンが引き合いに出すのは、「Flavianの死や若者どうしの交流、それに友人の詩へのマリウスの賞賛」(67) といったホモエロティックな欲望を刺戟する箇所である。ジョンは神学校の青年たちに

その小説を読んでもらいたいのだが、「サイキ (Psyche) の物語」のために禁じざるをえなかったという (65-6)。この一節は無視できない。若者の友情とならんで、あるいはそれ以上に MA にとって重要なのはこの物語——正確には「キューピッドとサイキの物語」——で用いられているあるイメージではないか。そこにも MA にも、蛇の象徴的意味すなわち性交=生殖が邪悪なものとして表現されているからである。

『マリウス』のなかの物語でキューピッドはサイキを半ば強引に妻とするが、「自然の望みどおり、この新しいことは頻繁に行なわれたので彼女の喜びとなった」<sup>11</sup>。彼女はやがて妊娠する。蛇はキューピッドが寝間にやって来るときの姿とされており、同時に生殖器である。それは、神託により連れ去られたサイキを探しにきた姉たちが妹にこうけしかける一節に見てとれる——「彼がとぐろをいつもの場所におさめたあと、その寝息が聞こえてきたら、そばをそっと離れて灯りを見つけ、短剣を手にして、力一杯に蛇の首を切り落とすがいい」<sup>12</sup>。じっさいにはキューピッドは蛇の姿ではないが、それは問題ではない。暴力的な性行為とその後の快楽、そして妊娠という道筋が問題なのだ——ジョンにとって、それにたぶんムアにとっても。「サイキの物語」が性交=生殖を祝福しているために、『マリウス』は神学校の少年文庫から、またテキストから排除されなくてはならないのである。

『マリウス』には「サイキの物語」に先立って、産卵中の蛇が少年マリウスに嘔吐を感じさせる場面がしるされている。そこには、蛇の追跡と性交=生殖という MA のモチーフがもっと明瞭に出ている。

何か解明されていない邪悪なものにたえず追跡されているという感覚のため、彼はある特定の場所や人びとを疑うようになった。(略) ある初夏の陽射しのはげしい日、狭い道を歩いていたとき、蛇が卵を産んでいるのを見たことがあったが、彼はそのあとずっとその場所とそれによる醜悪な連想を避けた。というのは、その出来事のせいで何日

間も食事がまずくなり、眠りが不安定になったからである。その記憶がほとんど消えたころ、ピサの通りの隅でアフリカの見世物師が巨大な蛇を披露しているところに出くわした。蛇がのたくと、ふたたびかつての苦痛の印象が蘇ってきて、現実世界の下劣な側面を覗くように、また何日も食事と睡眠から喜びが失なわれた。(略) ゆっくりとぐるを巻きながら突然起き上がり、彼への敵意をあらわにした金属製の一本のバネになる姿には、卑しく汚れた、まるですっかり墮落しきった人間的特質があった<sup>13</sup>。

マリウスの嘔吐感は彼が「現実世界の劣化側面」の外側に立っているからではなく、自身の内側にそれに反応する部分をかかえているからにちがいない。ジョンとおなじく古い家系の「最後の者」であるマリウスは、友人 Cornelius とキリスト教徒 Cecilia との結婚を願いつつ、みずからの性を断念する<sup>14</sup>。蛇に追われる夢を見るキティはそれを意味づけることができないままに、「特定の場所や人を疑う」ようになる。セクシュアリティの内実とそれぞれの置かれた状況の相違はあれ、マリウス、ジョン、それにキティは性交＝生殖への嫌悪あるいはその忌避という点で一致している。

さて、MA のちょうど半ばの第四章から話はジョンとキティの関係をめぐって展開するが、ムアの関心は主人公のセクシュアリティの「面」的多方向性から、表層と深層の対立というモチーフへ移行していく。「規範としてのヘテロに抵抗するホモの葛藤」という観点が有効に見えることもあるが、それだけではとらえにくい事態が起こっている。欲望の抑圧と噴出のサイクル、衝動と理性の往復運動というモチーフを同時にしておく必要がある。ただし、この場合の「欲望」や「衝動」は個人のレベルを超えた何ものかを示唆している。

## 3

先にもふれたように、ジョンはしばしば女嫌い (misogyny) の言葉を



口にする——「女は生に混乱を招く力となるのではないか」(36)、女との同居には「人を墮落させる下劣なところがある」(103)。彼は、息子を家系存続の手段とする母と同一の発想をしている。その激越な否定は逆に、肯定へと反転する可能性をひめている。彼はイエズス会に失望して家に帰ってきた夜、母にキスされたりキティの「絵のように美しい姿」(112)に接したりした一日を振り返ると、「女たちの不愉快な影響力」に一晩中取りつかれる(114)。キティの存在が気になりはじめると、ジョンは彼女を「母よりも一緒にいて楽しい仲間」と考えるだけだが、それでも「短剣で刺されたような」痛みを感じる(173)。そのときの動揺ぶりは次のように表現されている。

理想が崩れた・・・これだけか。これまで必死に求めてきたのはこれだけなのか。恋をしているのか。ひとりの少女、少女・・・ひとりの少女が、これまで目を離さずにいた理想を汚すのか。いや。彼は痛々しく笑った。(略)彼は会話が楽しかったことを思い出した！結局どういうことになるのか。下品な愛情、結婚、子ども、家庭生活全般だ。これにくらべると・・・高貴で厳かな僧院生活、つねに感動的な、高邁で心高ぶる思想、気高い理想、学識ある人々との精神的交流、魅力的な指導的地位。これらを捨てられるだろうか。いや、絶対に無理だ。しかし、もうひとつの杯には心をとかず甘美な味わいがあった。それを予感して全身が熱くほてった。身を震わせ、熱で真っ青になったまま、ジョンは跪き、恩寵を祈った。だが、祈りは苦く薄味で、誘惑が過ぎ去るよう祈ることしかできなかった・・・『朝にはきっと強くなっている』と彼は言った。(174-5)

この一節に示されているのは、ホモソーシャルな社会(神学校)のなかで生きるホモエロティックな欲望が、それまで避けていたヘテロセクシュアルな欲望に揺り動かされたときのとまどいである。それにしても、現実の



キティの姿に照らすと、この空想は飛躍が激しい。17歳のキティの描写にエロティックな感触が薄いにもかかわらず、ジョンのヘテロセクシュアルな欲望だけが肥大化してゆくといった感がある。じっさい、本人もそのことに半ば気がついている。ジョンは5月の草原や空や鳥の囀りや花々の中でいっそう美しくなったキティを見て、顔を髪にうずめたいとか、冷たい首筋にキスしたいとかいった「どこからどうやって来たのか自分でわからない」欲求を感じる（180）。「こんなふうに奇妙にも突然、自分の靈的性質が低俗野卑な性質に取りつかれたこと」に驚き、冷静ではいられなくなる（ibid.）。そして彼女と自分の両方に腹を立てる——「いつもこうだ——魅力的で理想的な男の生がいつも女の影響によって汚されるということなのだ」（181）。だが、ふと我に返ったジョンはキティの純真無垢を思い出し、その言葉の不当性に気づく（ibid.）。これがジョンの「恋愛」に何度も繰り返されるパターンである。彼はキティを空想のなかに閉じ込めたときにはじめて十全な幸福感を味わう——「キティの存在すらあまりにも生々しい喜びなので耐えられない。彼女は私をあまりにも完全に殻の外に出してしまう。こちらの全身に流れ込んで来そうな、魔法にかけられたときの強烈な感覚を、春の日、回復期の患者に健康が戻ってくる時の心地よさで邪魔するのだ」。そう考えて彼は「目を閉じ」る（186-7）。

こうしたジョンに語り手は一定の距離をおき、場合によっては戯画化も辞さない。

彼は、自分の夢を正式なかたちで捨てようとしていることに気づいていなかったし、これから背負うことになる結婚生活の義務という不愉快な重荷のことも考えなかった。そばにいる美しい人、一種の天国への旅、星の光に照らされた花咲く地上の道。このヴィジョンの中にみな消えたのだ——少しまえにいる彼が指を差すと、うしろの彼女は遠く輝く天国の門を見上げる。彼はときどき彼女を腕に抱く。ときどき彼女の顔に唇を押しつける。キティは自分のもの、自

分のものだ、ぼくは彼女の救済者だ。(187)

ジョンは「結婚生活の義務という不愉快な重荷のことを考えなかった」という語り手の言葉は、あたかも語り手自身がそう考えているかのごとき印象をあたえる。ジョンのヘテロセクシュアリティの噴出を揶揄しているようだ。さらにこの一節は、ジョンにとって恋人との抱擁やキスの陶醉が父権社会における男の優位と宗教上のエリート意識をとまなうことをきびしく指摘している。このあとジョンにまた反動がやってくるが、「彼の性質は変わっていた」(188)。こんどはプロポーズの拒否の可能性が不安要因となるものの、キティは自分のものだと「腸から突き動かされて」(189) (in his very entrails) 叫ぶのである。すると語り手はもっとジョンから距離を取る。

毎日陽射しとキティとで満たされていた。ジョンはキティの快活さを愛情と取りちがえた。彼女を自分の確定した妻だと見なした。そんな可能性を示唆する言葉が語られることはなかったけれど。彼の想像力の外では何も変わっていなかった。(191)

語り手は、現実のキティを見ずに飛躍するジョンの妄想——「狂気の領域に隣接する観念性」を揶揄している。その後も、プロポーズを受け入れられたジョンについて語り手は「どれほど大事なことを約束したのかキティが気づいていないことに彼は気づかなかった」(212) と冷やかなコメントを加えたり、「これは彼の特徴なのだが、これからどんな新生活に入ろうとしているか、その特質について多少ともはっきり考えることを彼は避けたのだ」と指摘したりする(219)。ジョンの病的な空想に現実的な観点から水をさしているのだ。また、キティへのプロポーズに躊躇するジョンが、ふたりだけの散歩をさせてくれた母に心理的变化を示すくだりがある——「彼は母にたいする気持が和らいで、かつて辛く当たったことを後

悔した」(189)。このさりげない言葉は、ジョンのものの見方の恣意性を語っている。同様に語り手は、「僧侶らしい精神に完全に対立する」(54)ことから嫌っていたサセックスの風景をジョンが「気に入りはじめている」(201)と書き、「魅了されているかのよう」(209)と表現する。キティの現実の姿に照らすと、ジョンの「狂気の領域に隣接する観念性」が浮上する。語り手の冷ややかな視線は、多方向的なセクシュアリティをヘテロに収束させようとし、なおかつ恣意的で自己中心的なものの見方に陥りがちなジョンのあり方に向けられているように思われる。

表層の理性を深層の性衝動が根底から揺さぶるというフロイト的発想は、ショーペンハウアーからの借用であろう。ムアはこのころ『意志と表象としての世界』の第四巻および『エッセイと断片』を読んだらしい<sup>15</sup>。MAの翌年に出た*Confessions of a Young Man* (1888)の「序」では、自分がどれほどショーペンハウアー哲学に負うところが大きいか述べている<sup>16</sup>。MAにおいてその名は(否定的な文脈で)一度だけしか言及されていないが(134)、ジョンの女嫌いはショーペンハウアーの名高い女性蔑視と共通するものがあるし<sup>17</sup>、「死への恐怖」と「生への憎悪」のどちらも抱き(28)、最後は欲望の断念を決意する主人公の考え方にもこの哲学者からの借用が見られる。この点についてここまで言及してこなかったが、今後の展開をたどる上では必要となる。

ショーペンハウアーによれば、仮像の背後に存在する「生への意志」(the will-to-live)が人間を自己防衛だけでなく種の保存へと、つまり生殖活動へと駆り立てる。個々の人間は自己の幸福のために行動していると思っているが、じつは「生への意志」が彼らにそう錯覚させているにすぎない。この哲学にとっては性本能が根源的な力であり、知性は副次的な役割しか果たさない。

性欲が生きんとする意志のもっとも決定的な、もっとも強力な肯定であることは、これが動物ならびに自然状態にいる人間にとって、生

の究極の目的であり、最高の目標であることによって裏書きされている。彼が最初に努力するのは自己保存であるが、それへの心配をすませてしまうと、ただちにおこなう次の努力は、端的にいて種族の繁殖である。(略) 生きんとする意志としての自然にとって、大切なのはただ種族の保存だけであり、個体などは自然にとってみればものの数にもはいらぬからである。(略) 生殖器は身体のいずれの外的器官にくらべてもはるかに多く意志の支配のみを受けていて、認識にはまったく支配されていない器官である<sup>18</sup>。

ジョンが「どこからどのように来たのかわからない」と言う「腸から突き動かされる」欲望は、ショーペンハウアーの「生への意志」に相当する。母や故郷の風景にたいするジョンの見方の変化も、認識を左右したり、生殖に駆り立てるために個人のエゴイズムを利用したりする「生への意志」の狡猾さを説く哲学者の言葉とリンクする<sup>19</sup>。『マリウス』の蛇はここで、ショーペンハウアーの「生への意志」に重ねられる。これをふまえてキティの事件を読んでみよう。

夕暮れどきの丘でキティは「残忍な目つき」で近づいてくる放浪者を見て気を失なう。意識を取り戻すと、彼女は男に「不当に扱われた」のであり、「あやうく殺されかけた」と事件を総括しようとするが、「心の奥に真の考えがある、しかしそれを見すえる勇氣はなかった」(228-9)。その考えは「悪夢の中の怪物のように、闇の中において見つけることはまずできない、深くて形のない考え」である(220)。この混沌として不定形の「考え」とは、放浪者個人の欲望を超えたもの——人を生殖へと駆り立てる「生への意志」である。キティの不安は家に帰って「男や女の顔を・・・男の顔を見る」(she would see men and women's faces... men's faces) ことだ(231)。一瞬の空白(…)ののち、彼女は自分が男たちの欲望の対象だと自覚する。農家の男の声が彼女を「不安と激痛」に駆り立て(233)、帰宅すると、父に会わないように自分の部屋に二重に鍵をかける。が、そこも安心でき

ない。小さなベッド、祈祷書、刺繍箱、手作りのカーテン、十字架、友人の写真、雑誌から切り抜いた子どもの写真といった「ふだん見慣れたものを見て、彼女ははっと驚く！」(234)。「安らぎの避難所」が不安を煽る空間へと変貌する(235)。彼女はベッドの手すりを握りながらその理由を考えるが「どうもわからない。記憶であると同時に疑惑でもあるものが彼女の心をみたく」(ibid.)。見慣れたものがかえって不安を煽るのは、その背後にあるか、あるいはそれじたいが偽装であるかもしれぬ無気味なものとの落差をより感じさせるからである。もうひとつの意味の層では、信仰にかかわるもの(祈祷書、十字架)が現在の彼女に罪悪感をかきたてるのにたいし、装飾品(刺繍箱、カーテン)、ベッド、子どもは結婚生活における女の役割ひいては性交=生殖を暗示する——キティが見る悪夢はこれらふたつの意味にかかわってくる。ベッドは事件の丘(記憶)と新婚の床および両親の床(疑惑)とを、その意味は「わからない」が想起させる<sup>20</sup>。彼女の不安は、かつてのジョンにとって「官能的で大きなベッド」を備えた部屋が「この世のおぞましい法則と肉欲の象徴」(165)であったことに対応している。ジョンが忘れたかにみえる嫌悪感、キティの夢のなかにかたちをかえて反復されるのだ。

キティはベッドに横になると、「放浪者の肌と顔の臭い」が月光のなかを感じられる。彼女は「それをはねのけることができなかった。叫び声をあげて拒絶したが、またもや現われて、あざ笑いながら枕に身を横たえた」(236)。ありえた新婚の床入りにとって代わるのがこの場面である。少なくともキティの無意識のレベルでは、それはジョンとの新婚の床である。悪夢から覚めても、ふたたび放浪者の顔と息、酔眼がそばにある(244)。

キティは廃墟の墓地の裂け目に落ちて「眠っている蛇」に手がふれたり(237)、つる草に足をとられ「酔っているような鈍重な目つき」の「卑猥な」ハイエナに息を顔に吹きかけられたりする(239)。ジョンの屋敷の広大な庭園でも巨大な蛇が追いかけてくる。次の一節の性的な意味合いは歴然としている。

長くて細い首が彼女にのしかかっている。彼女は、自分の体を蛇が恐ろしい力でとぐろ巻きにしてのたくっているのが感じられる。彼女の生命全体を、ひとつに絡み合った厭わしい抱擁の中に引きずり込む。(241)

マリウスを悩ませる蛇と「サイキの物語」における蛇のイメージがここに重なる。キティは通りを逃げ、海岸の絶壁を降りていくが、その努力も空しく、蛇の重みを感じながら、ともに海中に落下する(242-3)。ひとりではなく「ともに落下する」(both fall, fall, fall)のは、性的な意味と同時に、彼女が無意識のうちに取りつかれる欲望の可能性を暗示しているのかもしれない。目を覚ました彼女はそれが夢であったことに安心するが、すぐに記憶が蘇り、「夢よりわるいものがある」ことを悟って絶望する(243)。無意識のうちにあらたに発見した「現実」の方が悪夢よりも恐ろしいのだ。

キティはつづいて自分の葬式を夢に見る。この夢は、先に述べたように罪障感のあらわれである。彼女は白い死装束に黒い染みがついていることに自分だけ気がつく。参列者のなかに見覚えのない顔があり、みな注意を染みから逸らしている。やがて亡骸を運ぶ天使のあいだに混じり込んだその人が棺桶の白い花を取ると、染みが浮かび上がってくる。キティは天から地へ、さらに海へと落下してゆく。黒い天使たちのなかにも、彼女を抱こうとしている人物を見分けるが、それがだれなのかは言語化されない——「それは、それは——あの・・・」(248)。

近年の研究には、レイプ犯をジョンだとするものがある<sup>21</sup>。それによれば、友人を騙り、「染み」の存在を参列者の目から隠したり暴いたりするこの人物もまたジョンである。しかしこの読みは無理だろう。顔には「見覚えがない」とされているし、事件後のジョンの言動のどこにも犯行の心理的余波を暗示する箇所は見当たらないからである。ムアがこの箇所(「あの・・・」)を空白にしておいたのは、ショーペンハウアーのいう「生へ

の意志」をキティが（まただれもが）表現できないからであろう。放浪者個人はもはや問題ではない。げんに、夢から覚めたキティは「丘と放浪者の記憶について奇妙にも執拗に考えた」（250）とある。放浪者の記憶にいくら執着しても、恐怖の根源をつきとめることはできない。肝腎なのは、キティの目には、レイプ犯の放浪者が男という点で父やジョンに二重写しとなり、さらに彼らの姿が横暴な何かを宿しているようにみえるということである。

キティは、ドレスについているハリエニシダを払い、腕が傷により変色しているさまを見たあと、自分の体をガウンですっかり覆ってしまう。体をマットレスに擦りつけて「厭わしい自分」（253）から逃れようとし、欲望の対象である自分を否定しようとする。階段からキティを呼ぶ父の声は「偽りの、無気味な、おぞましい」ものにひびく（254）。ジョンと放浪者とが「彼女の心の中で混同され」（256）はじめる。目覚めて下に降りていくと、ジョンが手を伸ばして体にふれようとするので、キティはふたりの男から離れたところに坐る。次の一節は、キティの見るもっとも恐ろしいヴィジョンである。

父の優しく慈愛にみちた顔が本物の顔ではなくて、もうひとつの顔にかぶせたマスクであり、マスクがすべり落ちれば、その顔は恐ろしくも厭わしい、まるで——（略）彼女が昔から知っていたジョンの顔は偽物ではないかと疑わずにはいられなかったし、幻覚がふくらむにつれて、彼の大きく穏和な目が小さくなってゆき・・・顎が突き出て、額が狭くなり・・・筋張った大きな手が、ああ、何と似ていることか！（258）

似ている何ものかの正体がここでも明記されていないのは、それが放浪者でもあり蛇やハイエナでもあり、同時にまたジョンをも変貌させる原初的な、ある表現できないものだからである。これよりまえに、キティは「と



てもちがうふたつの感覚に気づいていた——ひとつは理性の結果であり、もうひとつは狂気の結果であると」(257)。そして「どちらか一方のために他方を抑圧することはできなかった」(ibid.)。理性では父や婚約者をそれとして認識しているが、無意識のレベルは彼らを突き動かしている「生への意志」を映し出している。彼女のいう「マスク」(mask)はショーペンハウアーの用法を想起させる。彼は、性本能を隠蔽している経験世界を「ヴェール」(veil)と呼んだり、個人のエゴイズムや恋人への賞賛の言葉を性衝動が身にまとう「マスク」(mask)と表現したりしているからである<sup>22</sup>。犯人はジョンではない。しかし、ある共通性は示唆されている。彼が蛇から逃げられるのかどうかは結末からは判断できない。

レイプ犯が「生への意志」をになう存在として登場するのは時代的制約を感じさせる。レイプが過剰な性欲によるというのは現代の神話とされるからである<sup>23</sup>。しかしドイツの哲学者は、強制結婚や売春とともにそれを「性的衝動」(sexual impulse)によると見ていた<sup>24</sup>。ムアは改作“John Norton”において、この衝動の破壊力を効果的に示すためにいくつかの改変を行なっている。放浪者にまったく言葉を語らせないことでその象徴性を高めたり、ジョンがキティに抱きつき強引にキスする直前に「めまい」(giddiness)を設定し、その原因を説明不能な「衝動」(impulse)としたりするのがその好例である<sup>25</sup>。これに連動するように、「生への意志」に突き動かされるジョンへの冷やかな視線は改作では希薄になっている。その代わり、ジョン自身が自分とレイプ犯との共通性に思い当たり愕然とするのである<sup>26</sup>。これに劣らず重大な新趣向は、婚約後のジョンがこう願うことだ——「たまたま一瞬のうちに陥ってしまった難局から、何かの偶然(accident)で抜け出せるとよいのだが」<sup>27</sup>。次のページは、地面から起き上がったキティの目に「影のように消えていく」人の姿が映る場面である<sup>28</sup>。これにより、ジョンが事件の到来を願ったかのような印象が生まれる。ここで浮上するのが“Hugh Monfert”につながるホモとヘテ

口の葛藤というモチーフ、それに男のセクシュアリティに内在する暴力の問題である。“John Norton”が発表された90年代には男の性暴力や夫の性的支配への異議申し立てを行なう小説が出てくる<sup>29</sup>。『マリウス』の蛇とショーペンハウアーの「生への意志」を発想源とし、性交＝生殖への嫌悪からレイプを取上げたMAは、そうした種子をすでに孕んでいる点で、これらの小説の先駆——特異な変種——として位置づけられるのではなからうか。ムアの執着しつづけたジョン・ノートンものは、独身者のセクシュアリティにそれぞれ微妙に異なる光と影を投じている。

【注】

1. Joseph Hone, *The Life of George Moore* (London: Victor Gollancz, 1936), 154.
2. *ibid.*, 153.
3. Adrian Frazier, *George Moore, 1852-1933* (New Haven: Yale UP, 2000), 148, 150.
4. *ibid.*, 154.
5. *ibid.*, 150, Robert Langenfeld, *George Moore: An Annotated Bibliography of Writings About Him* (New York: AMS Press, 1987), 6, 31-2, *The Collected Short Stories of George Moore: Gender and Genre*, ed. Ann Heilmann and Mark Llewellyn, 5 vols (London: Pickering and Chatto, 2007), vol.1, 205-10. 事件については“no moral” “licentious fiction” (G. B. Shaw), “a most disagreeable and horrible incident,” “inartistic”などの言葉がある。
6. *ibid.*, 150-1.
7. ほかにMike Fletcher (1889)にも登場人物のひとりとして出てくる。
8. テキストは*George Moore, A Mere Accident* (London: Vizetelly, 1887)により、引用頁は本文中に括弧で示す。
9. Frazier, 150.
10. ムアのペイター作品とりわけ『マリウス』への崇拝の言葉はGeorge Moore, *Avowals* (London: Privately Printed, 1919), 177-81を参照。

11. Walter Pater, *Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas* (London: Macmillan, 1910) 2vols, vol.I, 67.
12. *ibid.*, vol.I, 74.
13. *ibid.*, vol.I, 23-4.
14. 『マリウス』において変奏される蛇のイメージについては、J. Hillis Miller, "Walter Pater: A Partial Portrait," in *Modern Critical Views: Walter Pater*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1985), 75-95 (雑誌初出 1976)、岩瀬悉有ほか編『隠された意匠：英米作家のモチーフと創造』（東京：南雲堂、1996）所収の正木建治「反復表現とセクシュアリティ」を参照。
15. Frazier, 147-8. なお、ムアとショーペンハウアーについては Patrick Bridgwater, *George Moore and German Pessimism* (Durham: University of Durham, 1988), 11-56, David Alvarez, "The Case of the Split Self: George Moore' s Debt to Schopenhauer in *Esther Waters*," *English Literature in Transition 1880-1920*, vol.38, no.2 (1995), 157-67 も参照。
16. George Moore, *Confessions of a Young Man*, ed. Susan Dick (Montreal: McGill-Queens UP, 1972), 36.
17. ショーペンハウアー「女について」、『随感録』（秋山英夫訳）（東京：白水社、1998年）、260-68を参照。
18. ショーペンハウアー『意志と表象としての世界 III』（西尾幹二訳）（東京：中央公論新社）、49-51を参照。
19. Arthur Schopenhauer, *The World as Will and Representation*, trans. E. F. J. Payne, 2vols (New York: Dover, 1966), vol.II, 207-10, 372-3, 538. Christopher Janaway, *Schopenhauer, A Very Short Introduction* (Oxford: Oxford UP, 2002), 559 も参照。
20. 幼児虐待の記憶の蘇りを読む解釈があるが、拙論では取らない。Ann Heilmann and Mark Llewellyn, "What Kitty Knew: George Moore' s John Norton, Multiple Personality, and the Psychopathology of Late Victorian Sex Crime," *Nineteenth-Century Literature*, vol.59, no.3 (2004), 401-2.
21. Ann Heilmann and Mark Llewellyn, "What Kitty Knew," 372-403; Ann Heilmann

- and Mark Llewelly, "George Moore and Literary Censorship: The Textual and Sexual History of "John Norton" and "Hugh Monfert," *English Literature in Transition 1880-1920*, vol.50, no.4 (2007), 377, 381.
22. Schopenhauer, vol.II, 513, 535, 541,
23. ジーン・マックウェラー 『レイプ《強姦》：異常社会の研究』（権寧訳）（東京：現代史出版会、1976）、10-99、A. Nicholas Groth with H. Jean Birnbaum, *Men Who Rape: The Psychology of the Offender* (Cambridge, MA: Basic Books, 2001), 60-83.
24. Schopenhauer, vol.II, 535.
25. George Moore, "John Norton," in *Celibates* (London: Walter Scott, 1895), 408-9.
26. *ibid.*, 452.
27. *ibid.*, 413.
28. *ibid.*, 414.
29. Thomas Hardy, *Tess of the D' Urbervilles* (1891), *Iota*, *A Yellow Aster* (1894), George Egerton, "Virgin Soil" (1894) (in *Discords*). また、Ann Heilmann, *New Woman Fiction: Women Writing First-Wave Feminism* (London: Macmillan, 2000), 80-7 も参照。